

疫  
病  
神

sample

型通りの挨拶を二言三言かわしたあと、タブロイド紙の若い記者は、薄紫色の皮のソファにかしこまって腰を下ろした。体にトゲでも刺さっているのかのように記者は落ち着きなく尻をくねらせ、ギョツギョツと品のない音をさせた。そして頬を赤らめ、少し身をかがめてからようやく腰を落ち着かせた。記者はカバンから口紅と香水を取り出すと、女に手渡して言った。

「友人に頼んでパリで買ってきてもらったものなんです。どうぞお納めください」

女は贈り物を受け取ると、ブランドを見て言った。「結構なものを、どうもありがとう」

女は香水のフタを開け、手の甲に少し噴きつけると、鼻の下に近づけ香りを嗅ぎ、満足そうに言った。「さすがフランス製ね！」

そして次に口紅のキャップを開け、淡紅色の芯を伸ばしてみた。女の目は時に感情たつぷりに、時にあざけりを含んだように記者を見つめていた。記者は空咳をいくつかすると、顔をあげ、どもりな

がら聞いた。

「ところで、聞いた話では、あなたは変わったあだ名をお持ちだそうですね。『疫病神』とかいうあだ名を……」

クツクツクツという笑い声がメンドリが卵を生む時のように口からとび出した。女は恥ずかしそうに手で口元を隠した。それから、手を置き居住まいを正した。両膝をぴたりくっつけ、真剣な表情をして、しわがれ気味の声で興味をそそる話を淀みなくしゃべり始めた。

このあだ名、変わっているかしら？ 本当に変わっていると思う？ 「世間知らずは何を目にしてもやたら驚く。ラクダを見ても馬の背が腫れているという」実をいうと、あたしのあだ名はほかにもたくさんあるの。「疫病神」はそのうちの平凡なものの一つよ。これが変わっていると言うなら、じゃあ、「犬も食わぬ奴」はどうなの？ 変に思う？ 「雪ウサギ」はどう？ 「カラスのくちばし」は？ 「ゴロツキ」は？ 「ふたなり」はどうなの？ ほかにまだまだ少なくとも五つや六つあって、どんな変なあだ名になっていくわ。このあだ名、いい加減につけられた、意味のないものだなんて思わないでね。それどころか、あたしのあだ名一つひとつには、いくつものお話がくっついているの。メンドリのうしろにくっついているヒナドリみたいに、メス犬のうしろにくっついている子犬みたいに、おばあさんのうしろにくっついている子や孫みたいに、老將軍にくっついている兵士みたい

にね。あたしがどうしてみんなから「疫病神」と呼ばれるようになったかということが知りたかったら、ゆっくり聞かせてあげるわ。あなたは若くて男前だし、上品で礼儀正しいから、見ていて気持ちがいいし、話していて楽しいわ。あなたは知らないでしょうけど、あたしは十七回手術を受けて、長年の夢がかなったわ。今日、初めて記者のインタビュアーを受けるの。ご存知のとおり、あたしにインタビュアーがついているタブロイド紙の記者はハエの数のようにごまんといるわ。このインタビュアーは、あなたにとってラッキーであり、光栄なことよ。齒の浮くようなお世辞はいらないわよ。あなたを気にいったからこうするの。あなたに協力して有名になるチャンスを与えてあげる。有名になっても、あたしのことを忘れないでくれればそれでいいわ。もちろん、忘れても別にかまやしないけど。この世の中、薄情なのはほとんど男。どれだけ男に騙されたかしれやしない。もう一度騙されてもどうつてことないわ。あたし、足の爪にペディキュアを塗ったから、動きたくないの。悪いけど、刺繍道具の入ったカゴを取ってくれない。刺繍しながら、お話しするわね。

彼女は身を少しかがめ、柳の白い枝で編んだ刺繍カゴを受け取った。

彼女は白いワンピースのスカートの裾を何気なく引き下げ、少しごっこつした感じの膝を隠した。すると、女よりもずっと女らしいつるつるして毛のない脛が際立った。

真っ白な足、きらきら光る真紅の足の爪。それはまるで寶石のようであり、あやしい十個の小さな目玉だ。

右足首には金のアンクレットをしている。

白いシルクのワンピースの下の胸のところの、女の大切な部分が、彼女にもあるかといえ、こんもりと盛り上がったものがあるようだ。ええっ？ 胸の部分に赤い糸で梅の花が刺繍されている。ワンピースの胸元が広く開いているので、か細い鎖骨と本物そっくりの「乳房」の谷間が露だ。

なめらかでほっそりした首。これは普通の性転換者が気にして隠すところだが、彼女は平気で出している。喉仏が見えないようにするために二度手術したそう。

あごはとがつている。ひげはないが、やはり以前ひげがあった跡がわかる。

頬のふたつの大きなえくぼは人口的な跡が濃厚だが、実に美しい。

明るい電灯が彼女を照らしている。

彼女は気だるくソファに体を沈め、刺繍枠を持って、もつともらしく数針刺したあと、細くて長い女性向けのタバコに火をつけ、慣れた手つきで吸った。

中指と親指で軽くタバコをはさむ手つきは蘭の花のよう。

唇はやや厚く、とりわけ上唇はぼつりとして上を向いている。男の唇がこうだと顔全体が愚かに見えるが、女だとなまめかしくセクシーに見える。その唇には赤紫の口紅が塗られ、熟れた野葡萄のようだ。

歯並びはあまりよくない。二本の門歯の間には隙間がある。この欠陥を矯正するのに、琺瑯の矯正

器具をはめている。

「私を『化け物』と思うんだったら、いますぐ出て行ってちょうだい」矯正器具をはめているせいで、言葉がはつきりしない。「本当なら、矯正器具を取らないうちは、誰にも会わないと誓ったんだから。まして記者のインタビュなんて」

「めっそもありません。自分の姉のように思っています……」

これから、「疫病神」の話をするけど、お兄さん、気を散らさないで、集中して聞きなさい。あたしの話を聞き漏らしちゃだめよ。今日はたつぷり話してあげるわ。あなたにとって千載一遇のチャンスよ、もちろん、録音してもかまわないわ。

一九六八年三月二十七日の夜、あたしは黒龍江のほとりの蛤蟆屯ハマトルンという村で生まれたの。その日は快晴で寒く、北風が壁の隙間から部屋に入ってきた。あたしは神さまではなく、普通の人間よ。普通の人間だもの、生まれた時の様子なんてわかるわけがないわ。あたしが今から話すのは、すべて祖母から聞いたことよ。当時、うちにはビデオはなかった。ビデオがなければ、当然生まれた時の様子も録画できない。残念？ もちろん残念よ。あなたに言われなくても、あたしだってそれをとても心残りだと思っているわ。あたしが出産する時になったら、あなたに全過程の記録をお願いするわ。社会は発展し、人類も進歩している。前の世代の心残りを次の世代に繰り返してはいけない。あたしの性

転換手術のすべてがビデオに撮つてあるから、あとで興味があるなら、見せてあげる。あたしが出産することになったら、ビデオを撮つてくれる？ はははつ、あなたは本当に孝行息子ね。あたしはあなたのような、人の気持ちがかかる男の子が好きよ。何か飲む？ 盛んに唇をなめているようにだけど。気をつかわなくてもいいのよ。目上も目下もないわ、何でも言つてね。自分の家にいるように。

祖母の話では、あたしの母が腰が細く胸は豊かで、肌はすべすべ、髪は黒龍江省三江平原の土のように黒々として、艶があつたそうよ。息子の嫁選びのために、祖母は温泉の裏の林に隠れ、ソ連紅軍が残していった双眼鏡で三日間ずっと観察していた。周囲十数村の娘たちを祖母は一通り見ていたの。

まずこの温泉のことを説明するわ。この温泉は「女神の泉」といつて、天上の仙女がいつもここに来て入浴していた。その昔、牽牛はここで織姫をぬすみ見て、彼女の服をひそかに持ち去り、天上と人間界の良縁が結ばれたつてわけ。温泉は鳳凰山フオウシャンの後ろの小高い山の頂上トウジョウにあり、大きな碗ワンのような形をしている。幾筋もの泉が湯気を立て、濃厚な硫黄の臭いが漂い、碗の底から沸き出す温泉は、春夏秋冬、枯れたことがない。温泉の周りには、アカエゾマツやキハダ、シナノキ、それにシラカバ、ダケカンバなどの木々が生い茂つている。ここは一年中鬱蒼として、常春のようで、灌木の枝には色とりどりの花が群れ咲き、芳しい匂いを放つている。温泉から盛んに騰たぎがる水蒸気は寒さを追いはらい、一種独特な気候となり、まるで南国のよう。温泉はあたしの家から山道を十数里（七キロほど）